

「議員という大変困難な道を決心したのはどのような心境の変化があったのですか？」

平成 29 年 2 月 28 日

●ヘムヘムさんからの質問

西田先生は、お父様の参議院転出がきっかけで偶然に議員の道を歩むこととなったという話を聞いたことがあります。会計士という仕事はとてもやりがいがあり、それだけでも十分な給与が得られると思います。もともと自立志してはいなかったにもかかわらず、議員という大変困難な道に進むことを決心したのはどのような心境の変化があったのですか？また、そのような仕事において、現在は何を原動力として活動されていますか？

●西田昌司の答え

ご指摘の通り、私は偶然に議員の道を歩むことになりました。京都府議会議員からのスタートでしたが、府議会で議論をしたり、自分で勉強するうちにだんだんと日本が抱えている問題について見えるようになってきました。それはつまり、敗戦後の占領時代に GHQ によって作られた枠の中でしか日本人は物事を考えられなくなってしまったということです。GHQ に現行憲法を押し付けられて「自分の国は自分で守る」といった当たり前のことがタブーとされてしまい、京都府議会や国会でもそういった当たり前の議論が十分にされていません。

日本人は自立の精神を忘れてしまい、戦後 70 年以上もの時間が経過してしまっただけなのに、そのことに気づきさえしない人が圧倒的多数を占めるという情けない状況となっています。戦後レジームの欺瞞に気付いたとしても、そう簡単にはそこからの脱却はできないと諦観を決め込んでしまっている人もまた多いのです。このような絶望的な状況ですが、たとえ一人であっても国民に

訴え続けるよりほかはないし、たまたま議員となった私ではありますがその役を正々堂々と引き受けるぞ、と覚悟したのです。

私は偶然に議員となったのですが、この戦後日本において私のような人間が議員となったのは何らかの必然でもあると思うのです。それが神の采配であったのかどうかはわかりませんが、私はそこに運命を感じますし、私に与えられた使命だと思っています。私の活動が多くの人に評価されるともちろんうれしく思いますが、たとえ評価されなくとも、活動を続けることが私の存在理由—レーゾンデートルなのです。

「なぜ今の困難に立ち向かっているのか」「なぜ今の職業に就いたのか」といったことをよくよく考えると、自ら選んだという側面がある一方で、自分がそれに選ばれた、多くの人の中から自分がある必然をもってその役を背負わされたと考えることもできます。そのことを嘆くのではなく、積極的に引き受けることで人は主体的な人生を送れるのではないのでしょうか。

反訳：ウッキーさん

Copyright：週刊西田 <http://www.shukannishida.jp>